KIDS COMMUNITY
キッズ コミュニティー

財団法人
ボーイスカウト日本連盟
青少年元気サポート事業

〒181-0015　東京都三鷹市大沢４丁目 11 番 10 号
電話：0422-31-5161　ファクシミリ：0422-31-5162

－すべての子どもたちのための－

発達障がいのある青少年を支援する指導者のガイドブック

監修者　笹森　洋樹
独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
発達障害教育情報センター総括研究員

目　次

はじめに……2
ガイドブックの作成にあたって……3
発達障がいとは……4
発達障がいのある子どもの特徴……5
子ども理解　そして気づくこと……6
発達障がいのあるＡ君の例で色々な場面を考えてみました……7
第１章　活動の場面から
場面１：集会の前にこんなことしたら、後がスムーズに!!……8
場面２：ガツンとやる気にさせる!!（動機付け）……12
場面３：「みたい」「ききたい」「食べたい」「嗅ぎたい」「触りたい」「体を動かしたい」……16
場面４：ハイキングで見つける、調べる（電車博士、昆虫博士、草花博士）……20
場面５：子どもどうしの教え合い、でも、ちょっと疲れたら・・・休憩……24
場面６：してほしいことは具体的な行動にして、ルールはゲームをとおして……28
場面７：公共施設、公共機関のマナー、人付き合いのマナーの学習が大切!!……32
場面８：集会後、すぐに保護者の前で本人の一日をほめてみたら・・・……36
ポイントⅠ　子どもが見通しをもてるようにわかりやすくすること……40
ポイントⅡ　指導者間の共通理解は大切……41
ポイントⅢ　得意なことを発揮させること……42
ポイントⅣ　発達障がいのある子どもへの配慮は全ての子どもたちにとっても共通した配慮……43
第２章　集団活動における支援……44
第３章　保護者との連携……46
第４章　活動のための支援体制……48
第５章　リーダーとしての心構え……50
＜資料＞神戸大会パネル討議……52
世界における障害児スカウティング……53
第10回日本アグーナリー開催……54
第10回日本アグーナリー奉仕スカウトの感想……56
アグーナリーの歴史……57
用語解説……58
あとがき……61

はじめに

㈶ボーイスカウト日本連盟
青少年元気サポート事業運営協議会
会　長　鈴木　国夫

ボーイスカウト日本連盟は、更なる成長発展を期して社会に開かれたスカウト運動として、多様性ある社会のニーズに応えるために、平成20年度に文部科学省から委託事業である青少年元気サポート事業「キッズコミュニティー」を受託しました。

“地域社会が強く優しい子どもを育てる”ことの大切さを多くの人々が共有し、全ての境遇の青少年が共に体験活動を展開できるよう、継続して支援することをねらいとするものです。知的障がいや発達障がいなどのある青少年を含めた多くの青少年が自然体験活動を通し、日常生活を営むための基盤づくりを行うと共に、その障がいを理解し合い、成長していくことを目的としました。

1907年に始まったスカウト運動は、その直後から障がい者と積極的にかかわり、1911年には米国において目が見えない子どもを対象とするスカウト隊が発足、1926年には英国で組織的に障がい児スカウティング部門が設置されました。ボーイスカウト日本連盟では1968年（昭和43年）に組織的な活動が始まり、福祉元年といわれた1973年（昭和48年）に第１回日本アグーナリーを開催し、また、指導者対象のセミナーを行うなど積極的、継続的にこの分野に取り組んできました。

本冊子は、特に発達障がいのある児童を対象に―外見上直ぐに障がいとわかる児童を対象とするものではなく―指導者としてその対応をどのようにすれば良いかを、運営協議会研究チームの先生方に編さんしていただきました。

指導者にとっても、障がいのある子どもにとっても、経験を積んでいないことや、初めてのこと、知らないことなどがまだまだ多くあると思いますが、本冊子を参考にしていただき、指導者１人が悩むのではなく、周囲の支援や協力を得て、多くの子ども達と過ごしていただくことを期待いたします。

ガイドブックの作成にあたって

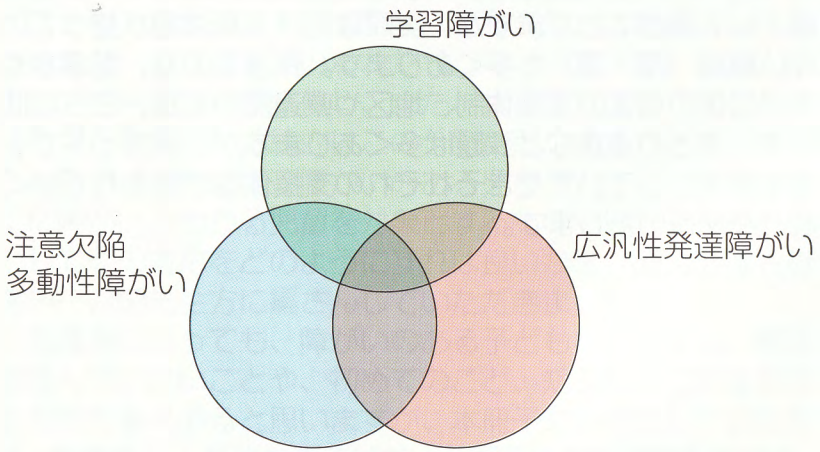
平成20年度の文部科学省青少年元気サポート事業の委託を受けボーイスカウト日本連盟に青少年元気サポート事業キッズコミュニティーを立ち上げました。初年度は実行委員会を秋田、千葉、東京、石川、京都、広島の６県連盟に設け知的障がいや発達障がいなどのある青少年を含めた多くの青少年が自然体験活動を通し、日常生活を営むための基盤作りを行うと共にその障がいを理解し合い、成長していくことを目的として 活動を開始しました。この事業を推進する為に全国で講習会を開催すると共に活動拠点を拡大し、地域社会が強く優しい子どもを育てることの大切さを多くの人々が共有していくねらいがあります。また運営協議会の中に研究チームを設け専門的立場から障がいのある青少年にどのような支援方法が適切か、またそれを青少年団体の指導者にどのように伝えていくかを検討してきました。今回のガイドブックは目が見えない、耳が聞こえない、身体に障がいがあるなどの障がいのある青少年ではなく、一見他の子どもとあまり変わらない様子の子どもである発達障がいのある子どもを対象にいたしました。また特に指導が難しい小学生年齢を中心にまとめております。ボーイスカウト日本連盟では全国の組織（団・隊）で発達障がいの子ども達を受け入れることを理想として掲げておりますが、実際は受け入れ体制が整っていない組織（団・隊）も多くあります。保護者の方、指導者や育成団体の相互の支援体制、地区や県連盟の支援、さらには教育行政との連携など課題は多くありますが、本ガイドブックを参考にしていただきそれぞれの支援体制が築かれていくことを期待いたします。

発達障がいとは

学校教育では発達障がいのある子どもへの理解と支援が始まっています。合わせて生涯学習においても、発達障がいのある子どもが楽しく充実した時間を過ごせる居場所の必要性が求められています。

我が国では平成17年に『発達障害者支援法』が定められ、初めて発達障がいのある子どもについて支援が必要であることが提示されました。発達障がいは『自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であって、その症状が通常低年齢において発現するもの』と定義されています。

平成14年の文部科学省の調査によると、小・中学校には、発達障がい、もしくは似通った姿を見せる子どもが6.3%在籍しており、ほとんどが通常の学級で学んでいます。学校教育では、「学習障がい」「注意欠陥多動性障がい」「広汎性発達障がい」（「アスペルガー症候群」「高機能自閉症」など）を別々にとらえるのではなく、状態像が重なっている場合が多く、特別な教育的支援が必要な子どもたちとして受け止め、なるべく早く気づき、対応を行うようにしています。



発達障がいのある子どもの特徴

一般には「ちょっと変わっている子」「いやになれなれしい子」「きれやすい子」など、さまざまな姿が見受けられますが、集団に入りにくかったり、行動を共にすることが苦手なタイプが共通した姿として多くみられます。基本的には知的発達に遅れはありませんので、知的障がい児が示す状態像とは異なるので留意が必要です。

専門家は発達障がいの有無を見分けることができますが、私たち指導者には、これまでよく知られている障がいと異なり、障がいの有無に気づくことが難しい状況です。そこで、発達障がいに近いタイプかなと気づき、障がいに応じた配慮や指導が求められます。

特徴としては
・基本的には知的発達に遅れはない
・中枢神経系（脳）の機能に障がいが予想される
・言語・協調運動・認知などにおいて特異な姿がみられる
・得意なことと苦手なことがはっきりしている

状況としては
○通常の学級に学ぶ子どもの中に6.3%の割合で在籍していると考えられる
○周りの人が気づきにくい、本人が気づかないこともある
○社会性や行動面、学習面に課題がみられる
○二次的障がいの結果、不登校、反社会的行動がでることがある
○育てにくさが原因で被虐待児になることもある

子ども理解　そして気づくこと

障がいに気づきにくいため、発達障がいは保護者も「少し変わっているかな」「もう少し友達と一緒に行動がとれると良いのに」と思いつつ、専門機関に相談することなく過ごしてきてしまいがちです。

たくさんの子どもたちと接してきた指導者であれば、「少し変わっているな、もしかしたら発達障がいに近いタイプの子どもかもしれない」と早くに気づいてあげたいものです。気づいたからといってすぐに保護者に話す必要はありません。どのスカウトにも楽しい充実した集会を実施するために、本書を参考にしながら、少し特別な配慮を試みてください。きっと、指導者としてその子どものことが少しわかってきたという実感がもてるようになり、子どもの笑顔が増えたことに気づくようになります。そして他の子どもに対する理解や対応の方法についても資質が深まってきた自分に気づくはずです。

預かっている子どもの中に、発達障がい児がいたらどう対応するのがよいのか、という目的で、支援の在り方についての理解を推進するために本冊子は作成されました。編集が進むにつれ、子どもたちを指導する際に、日頃から、一人一人の子どもを受け止め、理解し、一人一人に応じた関わりをすることができる指導者であれば、発達障がい児についても特段の配慮は必要がないのではないか、と気づくことができました。

発達障がいのあるＡ君の例で色々な場面を考えてみました

登場人物は発達障がいのあるＡくん
Ａくんのおかあさん
Ａくんの指導者Ｓ隊長
隊長が信頼しているひげのＫ先輩

ここは東京の三鷹
小学校２年生から５年生が集まってボーイスカウト野川第１団のカブスカウトの集会です。
最近、若いがんばりやの隊長ことＳ隊長が悩んでいます。
発達障がいのあるＡくんへの、指導がうまくできないのです。
かわいい元気なＡくん、みんなと一緒に活動できることも多いのですが、うまくできないこともあります。
いろいろ指導を試しても解決できないことがあるのです。
集会の途中でイライラしたり、つまらなそうにしたりしているＡくん、とうとう欠席する日もでてきました。
そこでＳ隊長は、ひげのＫ先輩に相談しました。Ｋ先輩の助言をいただきながらＳ隊長は指導方法を工夫しました。
するとＡくんの笑顔が増えました。集会も休まずに参加できるようになりました。
あわせて他の子どもたちの表情も豊かになりました。
以前より子どもたちが隊長の意図を理解して活動しているように見受けられます。
さあ、どのような工夫でしょうか、のぞいてみましょう。

第１章　活動の場面から

場面 1　集会の前にこんなことをしたら、あとがスムーズに！！

活動をスムーズに進めるために準備が大切です。子どもたちの姿を観察し必要な手立てをしておきましょう。保護者とたくさん話し連携を深めましょう。

こんな場面です

子どもたちが集会に三々五々集まってきます。集会の始まる時間まで遊ぶ子、指導者にまとわりつく子、ポツンと立っている子、元気にあいさつをする子、保護者といっしょに来て離れない子、いろいろな子どもたちと指導者が集会の始まる時間までをすごしています。

子どもの様子をじっくり観察

- あいさつの返事はどうか
- 誰と誰が遊んでいるか
- リーダーシップをとっている子は
- いつものような元気がない子は
- 何もすることが無くてウロウロしている子は
- 服装が乱れている子は
- 体調が悪そうな子は
- いたずらをしている子は
- けんかをしている子は
- 不安そうな顔をしている子は
- 保護者から離れることができない子は
- 遅れてくる子は

なんでこうなるの？ふしぎなところ？

- 子どもたちも社会で生活しています。
- 「昨日、学校でいじめられた」「今朝、お母さんにしかられた」などの過去の体験が内面に残っています。
- 決められた、すべき事がないと不安になってしまう子もいます。
- これからの活動に見通しが持てないと不安になります。
- 忘れ物があるため、心配でしかたない子もいます。
- いろいろなことに興味、関心がうつり、あちこちと動き回ってしまう子もいます。
- 家庭のバックアップが弱い子もいます。

こんなふうにしてみました

(1) 全員にあいさつをしながら、子どもたちの反応を観察する。自由にしている場面の様子をよく観察する

(2) 集会の準備は副長たちに任せて、気になる子一人一人に声をかけ、保護者とも話をする。

①「何が不安なのか」受容的態度で話す。（否定的なことばはダメ）

「スケジュール」「忘れ物」「友達のこと」「今日の活動に自信がない」等

隊　長：「どうしたの？」

子ども：『○○○○○○』

隊　長：「そうなんだ。○○なんだ」

「そう、じゃあ××しないか」

②保護者との話では、子どもの情報収集と共に今日の活動のねらいを伝える。

(3) 組長集会を開いて今日のスケジュール等を確認する。

（必要ならば不安な子どもも同席する）

子どもたちのその日の心の状態を知ることができ、成長のきっかけとすることができる。

「スケジュールを視覚的に知らせる」
「忘れ物を準備してあげる」等の配慮で、不安を取り除き活動にスムーズに参加できる。

保護者からの信頼と協力を得る。

先の見通しを持つことができる。

ボーイスカウト教育法は宝の山

ボーイスカウト教育は個性教育と言われています。一人ひとりの心や身体の状態を把握するためにいろいろな工夫をしています。
（朝の挨拶、朝の点検、セレモニー等）

保護者とのコミュニケーションは、子どもの育ちを共有するためにも、ボーイスカウト教育法を理解していただくためにも、集会前の隊長の大切な仕事です。

リーダーシップを発揮することができるように、今日の集会の見通しを持たせるための組長集会が大きな働きを持っています。

場面 2　ガツンとやる気にさせる!!（動機付け）

活動で子どもに“やる気”を出させる為には
①活動の意味がわかること
②楽しいこと
③見通しがもてること
指導者がただ「がんばれ」と叱咤激励してもだめですよ。

こんな場面です

集会が始まります。指導者が話をしても、子どもたちはざわざわ、何だか集中していません。

子どもの様子をじっくり観察

- 全体の中で、話が聴けていないのでは？
- 集合整列なのに、離れたところでウロウロしている。
- すぐいなくなってしまう。
- 今日の活動の内容と自分の目標が理解できていない。
- 自分の所在がはっきりせず安心感が得られていない
- 周りの状況を知り、それにあった行動をとれないのでは？
- 視線は？

なんでこうなるの？ふしぎなところ？

- 始めと終わりがわからないと不安になって、じっとしていられなくなってしまいます。
- 「静かに!!」「がまん!!」と、注意ばかりされているとイヤになってしまいます。
- 自分の目標が具体的にわかるとやる気がでてきます。
- 話が長く、説明ばかりだと何が何だか、わからなくなってしまいます。
- ひとつのことに長い時間集中することがとても難しい子もいます。

こんなふうにしてみました

(1)「静かに!!」「がまん!!」と言葉で注意するのではなく、大事な話しや指示をするときには、注意が向くように、さりげなく肩をたたいたり、「○○くん」とおだやかに名前を呼んだりしてから話すようにする。
また、副長が側で、個別的に確認をしてあげる。

(2)「隊長の話」（今日の活動の内容と目標）はコンパクトに大事なキーワードが伝わるようにする。
隊長：「今日は何をするの？」
スカウト：『ユニセフ募金』
隊長：「誰のため？」
スカウト：『世界の子どもたちのために』
隊長：「立派な国際貢献だね、国際大使だね」
隊長：「気持ちをこめてお願いするんだよ」
スカウト：「はい」
隊長：「ありがとうございましたは、目を見てね」
スカウト：「はい」

みんなの前で、強い口調で注意されるよりも、おだやかに言うことで理解し行動にうつせます。

１分ぐらいの話でキーワードは３つぐらい。必ず、目標や行動を具体的に示すとわかりやすくなり、やる気がでてきます。

ボーイスカウト教育法は宝の山

ボーイスカウト教育法でセレモニーを大切にしているのは、けじめをつけ、初めと終りの見通しが持てるからです。
集中力を高めるために、セレモニーは短時間で、いつも同じ次第で進めます。

集合体形（円、U字）は全員の顔が見え、大輪やカブコールなどの象徴的儀礼を通して、集中力が高まります。

教育で一番大切なことは「動機づけ」です。ボーイスカウト教育法では「バッジ」や「夢の世界」を活用します（ビーバーの大冒険、君はスーパーサイヤ人、ハリーポッターの謎、のような）。

場面 3

「みたい」「ききたい」「食べたい」「嗅ぎたい」「触りたい」「体を動かしたい」

発達障がいは中枢神経系（脳）の機能障がいと言われています。脳への刺激は五感から。得手不得手の差が大きい事が予測されますから注意しながらも五感を使ったプログラムを積極的に行いましょう。

こんな場面です

話を聞いて次の人に伝える伝言ゲーム、Aくんはつまずいてばかり。Aくんの組のともだちもいらいらしだしました。

子どもの様子をじっくり観察

・見る力はどのくらい？
（ぱっと見て見たものをいくつも言える子、動いているものは、図形は、地図は）

・聞く力はどのくらい？
（電話番号をすぐに覚える子、番号を逆に言える子、嫌な音は、聞き間違いは、集中力は）

・運動能力は？
（ぎこちない子、ボールは、なわとびは）

・嗅覚や触覚、味覚の敏感？
（特定のもののにおいがだめな子、さわれない子、食べられない子）

なんでこうなるの？ ふしぎなところ？

・視覚や聴覚から入ってきた情報の処理の仕方にばらつきがあります。

・嗅覚や触覚、味覚などに過敏性があり、うまく対応できないことがあります。

・中枢神経系の機能がうまくはたらかないことが原因ではないかと考えられています。

・決して、なまけたり、さぼったりしているのではありません。

こんなふうにしてみました

(1) 子どもの特性にあった工夫をして、見る力、聞く力、動く力を少しずつ伸ばすためのゲームを多く取り入れる。
例）新聞紙の中から「あ」の字を探すゲーム。
伝言ゲーム（ことば、背中文字）
アクションソング、手遊びゲーム

(2) キムスゲーム
21個の品物を１分間見た後で、何個の品物を思い出すことができるか

例）動体を見て物をあてるキムス、
音を聴いて何の音かあてるキムス、
何のにおいかあてるキムス、
ブラックボックスの中に入っている物を手で触ってあてるキムス

例）子どもの発達と能力に応じて品物の数を３つのコースに分ける
・５品コース
・10品コース
・21品コース

ゲームの楽しさを通して経験を積むことで、少しずつではあるが、できるようになると自信がつく。

五感を働かせる活動を組合せ、あらゆる感覚を総動員して理解させると効果がある。
（見て、聞いて、さわって、動いて）

ボーイスカウト教育法は宝の山

ボーイスカウト教育では自然の中での五感教育が重要な柱です。（観察と推理）

五感を使ったゲームやソングがたくさんあります。

場面 4　ハイキングで見つける、調べる（電車博士、昆虫博士、草花博士）

ハイキングなど長い時間歩くような単調なプログラムはあきてしまいがち。そこで追跡ハイクにしたり、昆虫や花を見つけたりしながら歩くと目的地までがんばれます。

こんな場面です

今日のハイキングは電車に乗って、△△山へ行く追跡ハイキングです。同じ色のリボンを何本見つけることができるか。途中には虫調べや花のスケッチなどの課題があります。

子どもの様子をじっくり観察

- 一人一人の子どもの好きなもの得意なことは何？
- どのように役割分担をしたり協力したりしているか。
- 今、ここでやることが判っているかどうか。
- 一人だけ勝手な行動をとる子はいないか。
- 先頭になりたくて、ただ突っ走る子はいないか。
- すぐに「疲れた」と言って歩かない子はいないか。

なんでこうなるの？ふしぎなところ？

- 好きなことと嫌いなことで取り組む意欲に大きな差が見られます。
- 目的や活躍の場が判らないと落ち着きがなくなり、勝手な行動が目立つことがあります。
- 一つのことに夢中になるとまわりの状況が見えなくなることがあります。

こんなふうにしてみました

(1) 一人ひとりの得意な事、活躍の場を用意する。
例）登山口までのアクセス（電車博士）
例えば、鉄道に詳しいスカウトには、登山口近くの駅までの経路、時刻を調べさせ、乗車の位置や乗り換え等の案内をさせる。

(2) 追跡ハイキングの色リボン捜しでは、役割分担をする。
例）道路右側の下を担当
追跡サインの色リボンを探す範囲を分担をさせる。

(3) 挑戦することの見通しを持たせる。
朝の隊長の話の中で、コンパクトに挑戦する内容を話し、各スカウトが一番挑戦したいことをイメージできるようにさせる。

得意なことで活躍ができ、みんなから認められます。それが自信にもつながっていきます。

役割分担をすることで、いま何をすればよいかがわかります。

範囲が限定されることで見つけ易くなり、成功感を味わうことができます。

ボーイスカウト教育法は宝の山

他の人のための行動が認められる喜びを知ることはスカウト教育の基礎です。

得意な事でバッジを取得でき自信にもなります。

自然環境の中で観察力とグループでの協力を学習させます。

場面 5　子どもどうしの教え合い、でも、ちょっと疲れたら・・・休憩

発達障がいだからといって、いつも大人に教わってばかりなのは良いことではありません。先輩や友達に教わる方がうれしいし、仲良くなれます。

こんな場面です

先輩にロープ結びを教わっています。なかなかできずAくんはイライラした気分になり始めました。どうしましょう。

子どもの様子をじっくり観察

・教えても、教えても結びができません。

・相方共にイライラした気分になり始めています。

・何が難しいのだろう？

なんでこうなるの？ふしぎなところ？

・どうわからないのかを伝えることが難しいようです。
また、イライラしてきたらどうすれがよいのかもわかりません。

・ロープとロープの位置関係が難しいようです。ロープが交差してしまうと、どっちがどっちか分からなくなってしまいます。

・理解の仕方が独特な子どもがいます。「誰か、ぼくが分かるように教えてください」と言っているかもしれません。

こんなふうにしてみました

(1) イライラしてきた状況をリーダーが早く気づき、少し休憩することをすすめ、次のようなやりとりをする。
指導者：「少し難しいみたいだね」
スカウト：『うん、僕にはちょっと難しいや』
指導者：「そうか、じゃ少し休憩しょうか」
スカウト：『うん、また後で教えてね』
うまくいかないときには休むことを学習させる。

(2) 遊びの中で実用的にロープ結びを展開する
例）ふろしきで一升瓶をしばる。
例）木や崖を登るためにロープを結ぶ。

(3) どこが分からないのか？考えて、工夫してみる。
例）色のちがうロープを用意し、位置関係がわかりやすい工夫をして見る。
例）結び目をほどくことから始めて見る。

(4) 年長のスカウトに助けを求める
（同年齢より効果が期待できる）
教えてもらうような場面の設定をする

苦手な事や、対人関係（集団）の中で、長時間過ごすことは、とてもストレスがたまります。

イライラしてトラブルになる前に、自分の気持ちをクールダウンさせることが大切です。

また、苦手な事へのチャレンジを少し休憩したり、集団から少し離れたりする必要がある時に、それをどのように伝えるのかを学習することがもっと重要です。

このような工夫を色々と考えることが支援です。

ボーイスカウト教育法は宝の山

スカウト教育では、技能の伝承は年長のスカウトから年少のスカウトへと。スカウト同士の学び合いを大切にしています。

そして、異年齢小集団によるグループ活動が最大の特徴です。

リーダーシップの学習は相手の気持ちや状態を観察し、対応することです。

場面 6　してほしいことは具体的な行動にして、ルールはゲームをとおして

指導者が注意すると一時的に指示に応じた行動がとれます。でも長続きしません。行動の基準を事前に約束したり、ゲームなど楽しい中で子どもがその行動の意味を理解したりすると自ら律することができます。

こんな場面です

全員が落ち着かずザワザワしています。指導者が注意してもなかなか静かになりません。指導者は声を荒げ大きな声で「静かに！」と注意しました。皆静かになりましたがまだＡくんだけそわそわしています。

子どもの様子をじっくり観察

リーダーが

・「静かに!!」とどなっても、なかなか静かになりません。ますます、リーダーの声もスカウトの声も大きくなっていませんか？

・「静かに!!」と子どもどうしも注意しあっていますが、さわぎは大きくなっていませんか？

なんでこうなるの？ふしぎなところ？

・「静かに!!」と注意されても、どうしたらよいのか、何のために静かにするのか、わかりにくかったようです。

・子ども同士も注意をし始めると、誰の声に注目して聴けばよいのかわからなくなることがあります。

・周囲の環境が静かになれないような状況である場合にも集中が難しくなります。
（駅等の雑踏、周りの大人がおしゃべりをしている）

こんなふうにしてみました

(1) 事前に注目する時の合図を作る。
隊長が合図をしたらみんなも合図をして口を閉じて、隊長に注目するというルールを作る。

(2) 集散の合図も工夫する。
ある期間毎にルールとしてみんなで話し合って決めるようにする。
例）音源や鳴らし方を変える。
例）ジェスチャーにする「隊長が鼻を触ったら全員集合」

(3) 集合場所を変更する。
（駅前、繁華街などの騒がしい場所から公園等の静かな場所に）
静かに話が聴ける環境を常に考える。

「静かに!!」「静かに!!」とどなるよりも、具体的な行動のルールなので、わかりやすく、子どもどうしの教えあいもスムーズです。

ルールをみんなで決めることが重要です。

ボーイスカウト教育法は宝の山

スカウト教育は、少年たちの自治の世界です。

ルール作りは一方的な命令ではなく、みんなで決めることが大切です。

集散の合図も、絶対に変えることのできない一方的なきまりではありません。

集散の合図をもゲーム化して、楽しく展開することができます。

場面 7

公共施設、公共機関のマナー 人付き合いのマナーの学習が大切!!

大好きな電車に乗ったら、みんな大騒ぎ。公共でのルールはどの子どもにもわかるように事前に教えることが大切です。

こんな場面です

さわいだり、人のじゃまをしたり、公共の場で人に迷惑をかけている隊の様子です。

子どもの様子をじっくり観察

- ハシャぎすぎていませんか？
- 集団でいると興奮して気分が高ぶっていないか。
- 社会的ルールに気づかないあるいは忘れてしまっていないか。
- 一人でさわいでいて、常に注意されている子はいないか。

なんでこうなるの？ ふしぎなところ？

- 集団でいると社会的ルールをわすれてしまいがちです。大好きな電車に乗っていると余計です。
- 社会的ルールへの関心が薄く、自分の行動を結びつけて考えることが苦手です。
- 相手の立場や気持ち、周囲の状況を読み取ることがとても苦手です。
- 注意されただけでは、どうしたらよいかがわかっていません。
- 社会全体の規範意識が低下しているため、適切なモデルが示されていない状況があります。

こんなふうにしてみました

(1) 公共施設や交通機関を利用する機会を意図的に増やし、利用の度に、マナーやルールを全員で確認し、実践する。
交通機関での例）歩き方、乗り降り、車中、待機の仕方、荷物の置き方など。

(2) プログラムを行う時の生活目標を具体的に決め、ルールを守ることの意識付けを図る。
生活目標の例）目を見て「ありがとう」と言おう。
友だちがいやがる言葉はやめよう。

(3) 活動全ての場面が人付き合いの学習の場である。その場その場で指導をする。正しい行動を具体的に示す。モデルを示す。

公共の場に出る機会を増やし、数多くの体験を通して、学習することが重要である。

注意されるばかりで、それが日常的になると二次的な障害が生じてしまう。

全ての活動場面で正しい行動を具体的な指示やモデルとして示し、全員に習慣化させることが必要である。

ボーイスカウト教育法は宝の山

ボーイスカウト教育の目的は、よき公民を育てることにあります。

自己をふりかえり、規範意識を高めることもひとつの目標です。

行動や体験はふりかえって整理してあげることが欠かせません。それが、折々の「隊長の話」です。

場面 8　集会後、すぐに、保護者の前で本人の一日をほめてみたら・・・

集会ではたくさんほめられ、うれしい気持ちになっています。でもＡくんは家で報告をしません。保護者と連携し育てるためにも集会の様子をこまめに伝えましょう。子どもがほめられると保護者もうれしくなります。

こんな場面です

集会が終わりました。Ａくんのお母さんが迎えに来ています。今日の様子を報告しています。

子どもの様子をじっくり観察

- 子どもは、指導者と保護者がどんな話をしているか気にしている。
- 興奮が治まらず落ち着かずにウロウロしている。
- 思うようにできなかったことを思い出し、不満を保護者に訴えている。
- 隊長からほめられ、自慢げな顔をしている。

なんでこうなるの？ふしぎなところ？

- 注意されることが多いと「ぼくは悪い子だからどうでもいいや」と子どもは思っています。
- 目的意識を持って自分から主体的に活動できないと何をしてきたのかわからない気持ちになります。
- どんなことでも、ほめられることが大切です。自尊感情が人間の成長には不可欠です。

こんなふうにしてみました

(1) 今日の集会の目標にてらしてよいところを保護者の前でほめるようにする。
(活動中リーダーは彼の目標達成のため支援を行う。)

(2) 集会の中でも、良いところをみつけてできるだけほめるように心がける。

(3) 集会後にリーダー会議を開催し、子どもの様子や良いところを共有し、今後の指導の方向性を考えるようにする。

子どもの前で、保護者に今回良かったこと、次に頑張って欲しいことを伝えることで、次の集会への動機付けとなる。

何が良かったのか保護者との共通理解が進み、保護者も子どもを具体的にほめることができる。

子どもの特性についてリーダーの共通理解が進み、スカウトへの理解も進む。

ボーイスカウト教育法は宝の山

スカウト教育は一貫教育だと言われています。
リーダー会議、団会議の積み重ねにより、スカウトの成長がビーバーからベンチャーまで一貫性を持って支援されることになります。
(全ての子どもの様子や良いところ、こうなってほしいこと等を共有します。)

ポイントⅠ　子どもが見通しをもてるように わかりやすくすること

「集会は何だか楽しいな。でも初めてのことばかりで不安がいっぱい。」初めて活動に参加した子どもはみな同じ気持ちです。発達障がいのある子どもの場合、その不安がより大きいと言われています。

そこで、以前の写真やビデオを活用したり、緊張が強い場合は無理に参加させず見学でもよいとするなど、本人の意志を尊重したり、徐々に参加できるよう配慮したりします。

集会の中では、次のような見通しも押さえたいものです。

例えばドッチボールをすることになりました。ボール投げをあまり得意としておらず興味をもてない子どもに対して、指導者はゲームが始まると腕を支えながら一緒に投げるなどの工夫をして参加させます。途中でふらふらして場を離れてしまうこともよく見受けられます。「楽しくないのかな」と、指導者は受け止めがちですが、本人はゲームの終わりがつかめておらず、一度投げたらもう自分の役割は終わりと誤解している可能性もあります。

また活動において、目当てをはっきりさせ何をがんばればよいのかをつかませることで参加する姿勢が変わります。同様に簡単なルールを提示することで守ろうと努めることもできます。

休憩時間は何をしたらよいのかわからずに、何もせずにふらふらしながら過ごしてしまう場合もあります。休憩時間はトイレにいくこと、そして水を飲むこと、などと具体的に指示をだしてあげたいものです。

ポイントⅡ　指導者間の共通理解は大切

例えば「右手にマヒがあるからマッチでの着火には時間がかかりそうだ」というように、身体に障害がある場合などは、支援するわれわれ指導者にもわかりやすい面があります。しかし、発達障がいのある子どもの場合は、気づきにくく、またその状態像がさまざまで、どのような支援が有効なのか迷ってしまうことが多く見られます。また、ほめて育てることは大切ですが、本人にとってほめられる基準が適切でなければプライドを傷つけてしまうことにもなりますし、指導者もほめるタイミングを見つけることが難しいものです。

発達障がいのある子どもの指導において、学校教育では指導者の組織的な対応が有効であると言われています。同様に本人が一番認めてもらいたい指導者、イライラした時に場を離れクールダウンに寄り添う指導者、集会の前に予行や準備をして見通しをもつお手伝いをする指導者など、それぞれの役割を担い、チーム力で指導にあたりたいものです。

これには日頃から指導者間で共通理解を図ることが非常に大切となります。

指導者会議は、ややもすると、集会のプログラムの打ち合わせが中心となりがちではないでしょうか。本来、子どもたち一人一人のことについて話し合い、子どもたちの姿から集会の在り方や工夫を検討することが指導者会議の根幹をなすべきです。まして、配慮を要する子どもに気づいた場合、指導者間で十分共通理解が図れるよう、事前の打ち合わせはもちろん、事後の評価と反省、そして次の集会での改善策も検討する指導者会議でありたいものです。必要に応じ保護者から情報の提供を受けることも有効です。

ポイントⅢ　得意なことを発揮させること

発達障がいのある子どもの共通した特徴に、得意なこと、苦手なことの差が大きいことがあげられます。指導者は得意なこと、できることがたくさんある子どもであるがゆえに、苦手なことやできないことに注目し改善を求め指導をしがちです。しかし、苦手なことやできないことはその子どもの障がいによることも多く、指導者では治せない可能性があります。

余暇の活動では、楽しいことや得意なことを発揮し、指導者にほめられたり仲間に認められたりすることにより、活動が好きになり、また意欲的になれます。自信もつくことでしょう。すると、苦手なことにも少しずつチャレンジできるようになり、改善にもつながります。

次に得意なことを発揮できるような活動例を紹介します。年に一度、得意技集会を実施します。年度初めに自己紹介をかねて行うことも楽しいです。また年度初めに予告をしておき、年度末に行い１年間の成果として取り組むことも有効です。

また指導者の手伝いを好む手先の器用な子どもの場合には、毎回集会前１時間位前に来ることを約束し、表彰に使う組紐作りを任せます。得意なことを発揮し認められるだけでなく、役に立っているという満足感、合わせて集会の見通しをもちやすくなる効果もあります。

指導者が子どもの得意なことを発揮できるよう工夫することで、子どもはできた満足感や達成感、そして認められる喜びを感じられることでしょう。これは障がいの有無にかかわらず、全ての子どもが求めていることなのです。

ポイントⅣ　発達障がいのある子どもへの配慮は全ての子どもたちにとっても共通した配慮

子どもたちは多様です。国際化が進みまた情報化社会のため、興味関心の幅も広く、家庭の考え方・価値観も実に多彩です。成長も個人差が大きいように見受けられます。また発達障がいの他、アトピー、ぜんそくなど配慮の必要な子どもも多く見られます。加えて人間関係の希薄な社会状況となっています。

指導者の一面的な価値観に基づいた指導方針や評価では、「困った子ども」が多数表出してしまい、結果的には活動を続けられなくなってしまう子どもが増えてしまいます。

学校教育では、発達障がいのある子どもへの対応を機に『教職員の意識改革』が進められ、「困った子ども」を、教職員が指導する上で困っている子どもではなく、子ども自身が困っている子どもととらえるように変わりつつあります。

指導者には、セレモニーが長く集中できなくて困っている子ども、指導者の話が理解できず困っている子ども、集会がつまらなく困っている子ども、友達とうまくつきあえなくて困っている子どもなどに、気づいたり発見したりする力が求められています。

従来、指導者はプログラムの展開に気持ちがいきすぎて、このような子どもの「困り感」を見のがしてはこなかったでしょうか。指導者の喜びは子どもの笑顔や成長のはずです。子ども一人一人の気持ちを大切にする指導者になりたいものです。こうあるべきだという固定観念をはずし、子どもとともに活動を創造しましょう。

第２章　集団活動における支援

●「異年齢集団」を活かす

学校では同年齢の集団が学習活動のベースです。しかし、同年齢集団では障がいのある子どもがリーダー的な役割を担うチャンスはなかなかありません。

様々な年齢の子どもが所属する異年齢集団では、上の年齢（学年）の子どもがリーダー的役割を担うことが多くあります。障がいのある子どももその集団の中でリーダー的役割を担うチャンスが巡ってきます。グループ内で話し合いをしたり、メンバーをまとめたりすることが難しい場合もあります。地図を見たり、電車のダイヤを調べたりすることなど、得意なことも多くあります。ぜひ、得意なことを活かしながら、人と関わることの楽しさや、人をまとめることの難しさを体験させてください。

人との関わりを多く持つことは、社会性を育む上でとても大切なことです。また、障がいのない子どもにとっても多くのことを学ぶことができます。

●集団の中で「個」を育てる

集団活動というと「規律」と「秩序」を厳守し、統制のとれた集団作りと誤解されます。集団における規律と秩序は重要ですが、それはあくまでも方法の一部分です。

よい集団作りは方法であり目標ではありません。集団の活動を通して、その活動に参加する子ども一人一人が協調性やリーダーシップ、協力する気持ちを養うことにより、他人に対する思いやりや優しさを育むことが目標です。

●発達障がいのある子どもたちに対する「ルール」

発達障がいのある子どもの中には、その場の空気が読めずに関係のない発言をしたり、集団からの逸脱やパニックを起こしたりしてしまうことがあります。健常の子どもたちにはそのような行動が理解できず、「わがまま」「変な感じ」「この子がいるといつもゲームに負ける」「集合が遅い」と感じ、大人にも「トラブルメーカー」と見えてしまいます。

発達障がいのある子どもは、たくさんの人との関わりで疲れてしまったり、何か興味（気になる）のあること（物）を見つけると何はともあれ、近づいて見たり触れたりしないと気が済まない行動の特性があります。

集団で活動する際の明確でわかりやすいルールを作ります。例えば、休憩したいときは具体的に時計の針などを使って「時計の長い針が○○のところにくるまで休憩していいよ。」と決める、気になる物（こと）があって集団から離れたくなったら黙って行動せず必ず近くの大人に何がしたいのかを伝え、どのくらいの時間集団から離れてよいか許可をもらってから行動するなどのルール（きまり）を守るよう指導することが大切です。これらのことは障がいの有無にかかわらず必要なことです。

それぞれがルールを守って行動していることを、すべての子どもたちに理解されることが重要です。偏見や誤解を生ずることなく、得意なこと苦手なことを互いが理解し活動を展開することが大切です。

たくさんのルールは必要ありません。むしろルールが多すぎると活動の制約が増え、活動に魅力がなくなってしまいます。

●グループリーダーを育てる。

グループリーダーとはグループを構成するメンバー（子ども）の中から選ばれるリーダーです。大人にはわからない子どもどうしの人間関係やムードメーカーとして重要な位置にあります。

発達障がいのある子どもがグループにいると、リーダーの子どもは時として大きな負担を感じることがあります。いつも自分のグループだけが遅い、ゲームに勝てない、言うことを聞いてくれないなど、心理的なストレスを感じているようであれば大人が話を聞いてあげたり、必要なアドバイスをしてあげたりすることで改善できるでしょう。障がいのある子どもと関わることはとても大切であることを感じることができるよう導くことが大切です。

第３章　保護者との連携

発達障がいのある子どもたちの保護者のほとんどが活動に期待することは、集団を通して人とのかかわり方やルールに沿って行動することなどを学んで、社会で生きていく力を身につけてほしいということです。逆に考えると集団の中で皆と一緒にルールを守り、自分の役割を果たすことができるだろうかという不安を抱えていると言えます。しかしながら、コミュニケーションが苦手で集中力に欠けたり、衝動的な行動をしたり、自分の秩序にこだわったりなど、社会性の未熟な子どもたちにとって集団での活動は非常にエネルギーを要するものです。そこで、保護者との連携が非常に重要となります。以下に保護者との連携のポイントを列挙することにします。

- **好きなこと、苦手なこと、癖、できること、できないこと、かかわり方で注意することなど、その子についての情報を聞き把握する。**
- **活動に対して望んでいることを把握する。**
- **子どもの意見を尊重しながら活動での目標を設定して明確に伝える。**
- **できるだけ子どもの得意なことやできることをプログラムに盛り込みプラスの結果が伝えられるようにする。**
- **集会の前後など少しの時間でもできるだけ情報交換の場を設ける。**
- **活動場面でできること、できたことを伝える。**
- **必要があれば他の子どもたちや他の保護者に対して本人の特徴やかかわり方などについて説明をする。**
- **必要であれば関係機関での支援も紹介する。**

以上、保護者との連携についてポイントを少し述べましたが、保護者の中には、子どもたちの特徴を十分に理解して参加させている場合と特徴に気がついていない場合など様々なケースが考えられます。

特徴を理解して参加させている場合は比較的、課題の整理がしやすく、上記のポイントに沿って連携をとることによって対応が上手くいくと思われます。しかし、理解していない場合は、子どもの集会での行動状況を明確に伝えることも必要だと言えます。

保護者のねらいは、集団の中で個々の子ども達が遊べることを望んでいます。そのために、ほんの少しの時間でも定期的、継続的に報告・連絡・相談を綿密に行い、子どもの情報交換を行う必要があります。日頃のコミュニケーションを通して子どもに対する共通理解を図ることができます。リーダーとして気楽に自然体で保護者とともに活動を通して子育てをしていくという姿勢を持ちたいものです。とにかく、保護者以外の理解者として保護者に寄り添い不安を解消し支えていくことが極めて重要です。

第４章　活動のための支援体制

障がい児を受け入れる団体はたくさんありますが、ここではボーイスカウトの例を取り上げています。また、指導者が一人だけで行うものではなく、多くの人達の協力を得て行っていくものです。ましてや隊指導者個人が一人で頑張るものではない…ということを理解して下さい。

(1) 団内意識の統一

発達障がいとはどんなものなのかを、隊指導者を中心に団委員そして育成会員全員が理解しておく必要があります。これには、この運動の内外で開催される研修会に参加するのが早道です。ここで注意が一つあります。知識が偏らないように複数の勉強機会に参加することが重要です。

研修が進み、発達障がいに対して理解が進むと、子ども達を知識に基づいた眼鏡を通して見がちですが、これは厳に戒めなければなりません。子ども達の「個性(表現)」をそのまま受け入れ、心地よく活動できるように工夫をしてあげることが大切なのであって、個人で症状を断定することは全く意味のないことです。それは専門家の仕事です。

また、団内で発達障がいについて話し合う時は、クローズされた場所で行い、子どものプライバシーを守ることも大切です。

(2) 隊活動と子どもの成長

ボーイスカウト運動は幼稚園年代から20代半ばまで、子どもの成長に合わせたプログラムで展開する活動です。このメリットを活かす上でも、子ども達の成長を含めて「見守る」ことが大切です。この見守りの中に、発達障がいのある子ども特有の個性を観察することを含めるだけで、子どもへの支援方法や、個性に対応するヒントを見つけることができます。

これには、各隊間での子ども一人ひとりの情報の共有化とそれをバックアップする団組織が必要です。それら組織の中で子どもの個性を整理し、個々の支援に活用します。また、必要によっては、外部から専門家を招いて意見を聞くことも大切です。

(3) バックアップ組織

発達障がいのある子どものご家族は大きく分けて、障がいを認識しているグループと全く認識していないグループとに分けられます。全く認識していないといっても、発達障がいによる個性をこの活動の中で何とかしてほしい、という希望にあふれていることが多いのも事実です。

しかしながら、その対応は現場レベルでは大変な負担になる場合も多いのです。そこで、子ども達と直接向き合う隊指導者をバックアップする必要があります。隊指導者不足が現実的には語られていますが、この運動は組織を通じて子どもへの教育をするとあるように、団の中で一度話し合い、隊指導者の増員を含めて支援を行う必要があります。

(4) 活動の安全確保

各隊の活動は、子どもの成長に伴いより広範囲になり、また、その活動プログラムもより高度になります。その中で発達障がいのある子どもの安全を確実に保つには、プログラムの展開に応じて団からの人的・物的な支援が不可欠です。これらの支援を確保するには、団として育成会として支援の必要性を認識し、共通理解しておく必要があります。

(5) スカウトの募集

この活動に入る前には、各隊の活動見学が必ず行われます。そして仮入隊を経た後、正式な活動参加に至ります。この時間を有意義に利用することも大切です。子どもの観察と保護者との意見交換を確実に行い、入隊後の活動で戸惑わないように、事前準備を確実に行うことも大切です。仮入隊から正式な入隊までの時間を有効活用できるようになると、隊指導者もプログラム展開の修正や安全対策を確実に取れるようになり、それが全ての子どもに対して、楽しい活動の提供になります。

第５章　リーダーとしての心構え

障がいの種類によらず、障がいのある子ども達の余暇活動へのニーズは高まっています。「いつも余暇活動への参加の機会を探している」と保護者から耳にします。リーダーはどのような心構えが必要でしょうか。ここではあるグループの取組を参考に心構えのポイントを列挙します。このグループでは主となるリーダーの他に大学生がボランティアとして活動に参加する際に以下の注意事項を必ず守るようにしています。

- **的確にポイントをおさえ発言する。**
- **することを事前に伝えておく。**
- **言葉だけで理解できない子には紙に書いて伝える。**
- **否定語は使わない。**
- **感情的にならない。**
- **子どもから目を離さない。**
- **子どもと同じ目線に立つ。**
- **障害児ではなく一人の子どもとして接する。**
- **いろいろな視点で子どもと接する。**
- **その子どもの限界を決めない。**
- **お互い楽しく過ごす。**
- **どのような行動をおこすか予測しながら関わる。**
- **危険を予防しながらも子どもの行動をできるだけ見守る。**

障がいのある子どものためだけの特別な支援というものばかりというよりも、障がいのあるなしに関わらず、子どもと接する上での大切なポイントなのではないでしょうか。プログラムを実施する際、指導者はプログラムを上手く実行することに追われてしまいがちです。子どもたちがどう感じているか、どうしているかは置き去りにされてしまいます。プログラムがうまく進行することも大事ですが、それよりも子どもがどうしているか、ということの方がより大事であり、そのためにはプログラムの進行を中断しても良いくらいの気持ちが大切です。的確なときに的確なサポートをしてこそ子どもが自分らしく輝けるというものです。そういう意味では実

際にプログラムを運営するリーダーの他に絶えず子どもを観察しているリーダーがいると良いでしょう。そして保護者の疑問、不安に答えることができればさらに理想的でしょう。

スカウト運動の特徴

- **野外での活動を重点に置く（自然から学ぶ）：**
  年少者は近辺で、年長者はより高度な技術を習得し、国内外のフィールドで活動します。
- **異年齢層の集団である：年代に応じた活動**
  年長組～小学２年（ビーバースカウトという）、～小学５年（カブスカウト）、～中学３年（ボーイスカウト）、～19歳以下（ベンチャースカウト）、18歳～（ローバースカウト）に分かれます。
- **班などの小グループ活動：**
  その年代層の中で異年齢の小グループをつくります。グループ内の役割分担による自治活動、他グループとの競争によりグループや個人のレベルアップが図れます。
- **進歩制度：**
  いろいろなことに挑戦し、できたことを認め＝記章を服装類に着けます、又後輩にその指導ができるようになる仕組みです。
- **行うことにより学ぶ（体験活動）：**
  行動を通して頭の中だけでなく身体で学びます
- **ちかいとおきて（自分たちのルールの基本）：**
  社会のため、他人のため、自分のためにどのようなことをするのかを考え行動するための規範です。
  どの国でもほとんど同じ内容のちかいとおきてがあります。
- **ユニフォーム：**
  国によってユニフォームのデザインは多少異なりますが、ボーイスカウトと直ぐに分ります。また外国でも三指のサインはボーイスカウトの国際共通語、2400万人が仲間です。

【資料】神戸大会パネル討議

神戸・全国大会でパネルディスカッションが開催されました。

平成20年５月24日（土）、神戸で開催された全国大会でテーマ「共生する社会～より多くの青少年と活動するには」の下に、各方面の専門家を代表したパネラー（敬称略）肥田裕久（精神科医、ひだクリニック院長）、櫻井康博（さいたま市立宮前小学校校長）、石田易司（桃山学院大学社会学部教授、日本キャンプ協会常務理事）、西宮　詞（教育評論家、トヨタ子ども110番相談員・顧問）の４名の先生方と上道小太郎コーディネーター（日本連盟教育本部委員・プログラム委員長、高槻市立第６中学校校長）により、発達障がいなど特別な配慮を要する青少年への理解を深めながら、より多くの青少年がスカウティングのような体験活動に参加できるようにするにはどうすればよいのか、２時間半にわたりパネルディスカッションが行われました。

【資料】世界における障がい児スカウティング

(第10回アグーナリー奉仕スカウト向けテキストより抜粋)

１．障がい児スカウティング

障がいのあるスカウト、障害児スカウティングを英語で何と言いますか？というとHandicap Scouting, Handicapped Scoutingと思うでしょう。でも答えは簡単ではありません。歴史的、社会的背景からHandicap（障害）という言葉がマイナスイメージと言うことで使われなくなって、Disabled Scout、Special Scout、Challenged Scoutと様々な呼び方がされ最近ではSpecial Needs Scouting或いはScouting For Special Needsが正解ということになります。

２．Special Needsとは

Special Needsとは何でしょうというと、必ずしも障がいだけを挿す訳ではありません。

世界スカウト運動はScouting for all（すべての青少年にスカウティングを）を目標に掲げています。あらゆる状況にある青少年にスカウティングを広めようと言う考えです。そこからでてくるSpecial Needs(特別支援)という考え方は貧困、飢餓、紛争などの社会的困難も含んでいます。こうした状況にあるスカウトのこともScout with Special Needs（特別な支援の必要なスカウト）と呼びます。

ScoutsのもつSpecial Needs（特別支援）にいかに対応するかに重点がおかれています。

３．各国におけるScouting For Special Needs

ボーイスカウト日本連盟が属しているアジア太平洋地域の大きな特色の1つに学校ベースのスカウティングがあります。日本のスカウト活動は地域ベースのスカウティングですので想像がしにくいかもしれませんが韓国、タイ、インドネシア、マレーシア、台湾などでは、授業の中やクラブ活動の中で行われています。いわゆる「特別支援学校」においてもスカウト活動が行われ　特に生きる力を養うことを目的とし、経験重視のプログラムが自立に役立っているようです。

創始者ベーデンパウエルはこの運動のはじめの頃より障がいも個性の１つとして取り組むように言っています。世界ジャンボリーや日本ジャンボリーにも障がいのあるスカウトが参加しています。アグーナリーが注目されているのはスカウトみんながいつもよりちょっとお互いの個性について何ができるかを考え実行することに大きな意味があるからではないでしょうか。

【資料】第10回日本アグーナリー開催

平成20年７月31日から８月４日まで第10回日本アグーナリー（国際障害スカウトキャンプ大会）が兵庫県神戸市総合福祉ゾーン「しあわせの村」にて開催されました。

障がいのあるスカウト（特別な配慮を必要とするスカウト）たちが集い、外国からのスカウトやたくさんの奉仕スカウト、指導者、そして加盟員以外からの参加者と共に過ごした５日間。参加した全員が「共に生きる」という社会を身近に感じられた意義のある大会となりました。

会場内のいたるところで、これまでにない経験に目を輝かせるスカウトたちや、それをサポートするスカウト、スタッフを見ることができました。

今回は加盟員以外からの参加が多く、この大会を通じて、スカウト活動への理解が広まったのではないでしょうか。

また、８月３日には秋篠宮殿下、同妃殿下、眞子内親王殿下のご臨席をいただき、プログラムをご視察、その後の「兵庫の夕べ」ではお言葉をいただきました。

（スカウティング誌664号（2008.9月号）にスナップ写真を中心に特集されております）

秋篠宮殿下のお言葉

平成20年８月３日
「兵庫の夕べ」

本日、ここ神戸の地において日本アグーナリー「兵庫の夕べ」に出席し、皆さんとお会いできましたことを、大変うれしく思います。

この度の日本アグーナリーは、10回目となる記念すべき大会として、「We Can! あなたといれば…」のテーマの下で行われ、国内はもとより海外からも多数の参加者を迎えて開催されました。このことは今回の目的である相互に人格を尊重し、一人ひとりが何をしなければならないかを考えるうえで、大変意義深いものがあると思います。

スカウトの皆さんは、キャンプをはじめ多くのプログラムに参加し、また、奉仕活動を通じて、普段の生活ではできない新しい体験をされるとともに、たくさんの新しい友だちをつくられたことと思います。そして、皆さんがこの貴重な経験を今後の実生活に生かし、さらなる発展をされますよう期待いたしております。

終わりに、この大会が、参加されるすべての方々に実り多いものであることと、今後も「共に生きる社会」の実現を目指し、一層の活躍をされることを願って、私のあいさつといたします。

【資料】第10回日本アグーナリー奉仕スカウトの感想（抜粋）

■実際に障がいのあるスカウトと話し、いっしょに行動してみて想像できなかったような大変なことや、問題があり、すべて座学通りではないと感じました。障がい者はとてもフレンドリーで楽しく、壁なんて感じませんでした。

■自分を見つめ直す機会でもあり、ボーイスカウトの主な活動である奉仕活動にピッタリだ。障がいのあるスカウとどう生活するのか、大切なことが判った。これからの社会生活の中でもお互いを尊重して生きていけるように考えて行きたい。

■とても貴重な体験でした。参加してよかったです。障がいという壁をなくして障がいのあるスカウトと接することができました。普段の生活でもできるようになりたい。

■私は自閉症とダウン症のこと一緒に遊ぶ活動をしました。「もっと笑って」と思って活動をしましたが、もっと勉強しなくちゃと思いました。

■障がいとは？と考えるようになり、障がいとは気持ちや体で表すことが苦手な人だと感じました。

■障がい者との交流ができなかった。それは自分のコミュニケーションをとろうとする意欲が足りなかった。これからのスカウト活動や生活での中で積極的に取り組みたい。

■知的障害の子と接していたが、普通の子とあまり変わらないことがわかった。ただ少し接し方が違うことに気づいた。

【資料】アグーナリーの歴史

アグーナリー（AGOONOREE）とはギリシャ語の“AGOON”（集会、競技会の意）からきた言葉でボーイスカウト用語としては障がいスカウトが集まって開く全国的又は複数国の行事をあらわします。単に“AGOON”とする場合もありますが“JAMBOREE”，“CAMPOREE”のように“OREE”をつけてアグーナリー（AGOONOREE）と呼ぶようになりました。

日本におけるアグーナリーの開催

回	開催年月・開催場所	テーマ	参加者		
			人数	国数	海外
1	昭和48.8.17～20　愛知県 県立愛知青少年公園	かぎりなく、 はばたこう	200	—	—
2	昭和51.7.30～8.3　愛知県 県立愛知青少年公園	のりこえよう大地を ふんで	336	—	—
3	昭和54.8.3～7　大阪府 大阪市長居公園	のりこえよう大地を ふんで	660	11	32
4	昭和58.8.5～9　兵庫県 県立嬉野台生涯教育センター	のりこえよう大地を ふんで	972	15	49
5	昭和62.7.31～8.4　静岡県 御殿場市国立中央青年の家	のりこえよう大地を ふんで ―富士のふもとで、 元気にはばたこう―	989	14	95
6	平成3.7.25～29　東京都 国立オリンピック記念青少年総合センター	のりこえよう 大地をふんで	851	13	76
7	平成7.7.26～30　新潟県 国立妙高少年自然の家	広がる夢　友情の輪	880	16	99
8	平成11.8.5～9　愛媛県 松山市野外活動センター	広がる夢　友情の輪 ―あいことばは、 “We can”―	1143	15	130
9	平成15.7.31～8.4　石川県 珠洲市「リフレッシュ村 鉢ヶ崎」	広がる夢　友情の輪 ―あいことばは、 “We can”―	1252	0※	0※
10	平成20.7.31～8.4　兵庫県 神戸市総合福祉ゾーン 「しあわせの村」	We can! あなたと いれば	1078	6	89

※SARSの為、海外からの参加は有りませんでした。

【資料】用語解説

文部科学省（平成16年１月）小・中学校におけるLD（学習障害）、ADHD（注意欠陥／多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）から転記しております。

LD（Learning Disabilities）：基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を示すものである。学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接的な原因となるものではない。

ADHD（Attention Deficit/Hyperactivity Disorder）：年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び／又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。また、７歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

高機能自閉症：高機能自閉症とは、３歳位までに現れ、他人との社会的関係の形成の困難さ、言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないものをいう。また、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。

アスペルガー症候群：知的発達の遅れを伴わず、かつ、自閉症の特徴のうち言葉の遅れを伴わないもの。なお高機能自閉症やアスペルガー症候群は、広汎性発達障害に分類されるものと示されています。

発達障がいとは異なりますが障がいに関連する用語の記載

■知的障がい

知的機能の発達に遅れがあり、社会生活の対応に困難が伴うものです。ことばでの意志伝達が苦手なのでかかわりにくい面もありますが、全般的に人とのかかわりは好きです。抽象的理解が苦手なのでなるべく具体的な会話を心掛けたいものです。また取組に時間が掛かる人が多いので見守ってください。

■ダウン症

人間の身体はたくさんの小さな細胞からできています。その細胞には46個の染色体があります。ダウン症はその染色体に異常がありおこる障がいで知的障がいを伴います。人とかかわることが好きで、体の柔軟性が高い特徴があります。反面、発音がハッキリしない、高いところが苦手、体力がないこともあります。ゆっくり話を聞いてコミュニケーションをとりましょう。

■情緒障害

情緒の現れ方が、偏っていたり、自分でコントロールできないくらいに激しいため、社会生活に適応が難しい状態をいいます。集団生活が苦手な多動、特定の場所になると話せなくなるかん黙、自分では治せないチックなどの障がいがみられます。初めての場所、初めての人に弱く、慣れるのに時間のかかる人もいます。ゆったりした気持ちでかかわりましょう。

■自閉症

視点があわない、オウム返し、同じ行動を繰り返す、こだわりが強い、集団が苦手などの姿がみられますが、人により様々です。周りの状況がつかみにくい、コミュニケーションがとりにくい面も見られます。突然何かが気になりとびだしてしまう姿もみられます。運動や絵が得意であるなどの才能のある人もいます。説明を省き、簡単に話す方が理

解される傾向にあります。なお自閉症を広く捉えた場合に、広汎性発達障がいということばを用いることもあります。

■肢体不自由

体の不自由なことです。脳性マヒや事故、いろいろな病気などの原因があります。活動や移動に支援や配慮が必要となります。「何か手伝いましょうか」と声を掛けましょう。食事や入浴、着替え、トイレなどの介助が必要な時もあります。
本人に又は引率のリーダーに介助の仕方を聞きながら支援して下さい。

■視覚障がい

視覚的な情報が不足します。それを補うことが大切です。たとえば路上では具体的な状況をことばで教えて下さい。また「どう手伝いましょうか」と声をかけましょう。離れる時には必ず声をかけましょう。

■聴覚障がい

耳がよくきこえませんから、手紙、口話（口のかたちでよみとる）筆談、身振りなど耳以外の手段でコミュニケーションをとりましょう。私たちは耳からの情報に頼る生活をしています。
たとえば車の音が聞こえないので危険など配慮が必要なことが多くあります。

あ と が き

青少年元気サポート事業運営協議会研究チームを立ち上げ、過去の「障害児スカウティング」ハンドブックや、アグーナリー「特別な配慮を必要とする青少年のスカウティングについて」など多くの資料を再度見直し、今必要とされている「発達障がいのある青少年」に絞ってガイドブックを作成することになりました。

普段、発達障がいのある児童と接触の少ない指導者に理解を深めていただく為場面毎の対応に力を入れ編集いたしました。また、記載事項や内容について稿本を基に講習会を開き補足部分の検討も行い完成することができました。

編集に当たり下記執筆者の方々や関係者の方々が多くの時間を割き、何度も内容に手を加えていただきましたことを心より感謝しております。また監修いただいた笹森洋樹先生に厚くお礼申し上げる次第です。このガイドブックが多くの指導者の参考となり、障がいのある青少年育成に役立ちますことを期待しております。

監　修　笹森　洋樹（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
発達障害教育情報センター総括研究員）
執筆者　櫻井　康博（さいたま市立宮前小学校校長）
安藤　正紀（海老名市立中新田小学校教頭）
村山　大介（東京都立港特別支援学校主幹教諭）
森脇　賢司（行橋みらい学園園長）
中野　まり（ボーイスカウト日本連盟プログラム委員）
越森　　誠（心理カウンセラー）
イラストレーター　山田　政弘
このガイドブックは文部科学省元気サポート事業の委託事業として発行しております。

平成21年２月初版発行

発　行　財団法人ボーイスカウト日本連盟元気サポート事業
〒181-0015　東京都三鷹市大沢４丁目11番10号
TEL 0422-31-5161　FAX 0422-31-5162
http://www.scout.or.jp/index.html
印　刷　共立印刷株式会社

©2009 ㈶ボーイスカウト日本連盟　Printed in Japan　2009.2　20,000